

早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

概要書

極東生まれタタール移民 2 世の帰属意識

—「テュルク・ムスリムの国トルコ」は唯一の「故郷」なのか—

Senses of Belonging in Second Generation

Tatar Migrants Born in the Far East: Is ‘Turkic

Muslim Turkey’ Their Only ‘Home’?

2020年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

沼田 彩誉子

NUMATA, Sayoko

研究指導担当教員： 店田 廣文 教授

本研究では、「極東生まれタタール移民 2 世の帰属意識—「テュルク・ムスリムの国トルコ」は唯一の「故郷」なのか—」と題して、移住を繰り返した「タタール移民」が帰属意識をもち得る場所、すなわち彼らの「故郷」に着目した。本研究において、帰属意識という用語は、英語の *senses of belonging* の訳語として用いている。そのため、組織の一員として帰属するという日本語がもつ意味合いよりも、愛着や安らぎ、懐かしさといった感情を指している。「故郷」はそうした感情の対象となる場所であり、ひとつに限定されるとは限らない。

先祖の出身地、各地の移民社会、生まれた場所、育った場所、移住先、移住先候補のような場所は、2 世がこれまでの経験を振り返る際、どのように参照されているのだろうか。本研究の目的はまず、移住経験のなかでも移住理由とトルコ社会への適応に関わる個人々の語りを取り上げ、一連の場所に対する解釈を明らかにすることである。そのうえで、出身国から受入国というような 2 ヶ国、2 地域間にとどまらない移動を行う人びとの「故郷」について、トルコでの生活経験をもつタタール移民の事例を通じて考察することを第二の目的とする。

本研究においてタタール移民とは、ヴォルガ・ウラル地域を出身地とするテュルク・ムスリム（テュルク系イスラーム教徒）のうち、1917 年ロシア革命を最大の契機として極東各地へ逃れ、その多くは無国籍のまま第二次世界大戦という時代を生き延び、トルコやアメリカへと移住していった人びと、およびその子孫を指す。先行研究では、『大日本回教協会寄託資料』や内務省警保局『外事警察概況』、外務省外交史料館所蔵史料にもとづき、戦前日本の「回教工作」の実施対象としてのタタール移民について、客観的な実態解明が目指されてきた。

1920 年代後半～1950 年代初頭にかけて極東で生まれたタタール移民 2 世の経験は、グローバルな広がりをつながりをもつ。彼らは、世界規模で進む現代の移民現象に共鳴する稀有な主体であり、多様な課題の先行例となり得る経験を自分たちの物語として直接語るができる、最後の世代である。世代交代が進むなか、当事者へのアプローチは喫緊の課題であり、筆者は 2010 年より東京、神戸、イスタンブール、アンカラ、サンフランシスコ・ベイエリア、ニューヨーク等でインタビューや史資料収集を実施してきた。2 世を主とする約 75 名の関係者とコンタクトを取り、うち 41 名（女性 19 名、男性 22 名）については、同意を得てインタビューの録音を行った。そのうえで、桜井厚がライフストーリー論として発展させてきた方法論 [桜井『インタビューの社会学』2002；『ライフストーリー論』2012] に依拠しながら、個々の語りの分析を行った。

「1 章 極東からの移住」では、国籍取得や制度的側面に重点をおきつつ、極東からトルコ、アメリカへの移住の全体像を把握した。戦前から移住の動きはあったものの、本格化したのは第二次世界大戦終結後、特に 1950 年にトルコの政権を獲得した民主党が、テュルク系諸民族に受け入れの門戸を開いた後のことだった。タタール移民は「自由移民」、あるいはトルコ国籍保有者としてトルコに渡り、その後アメリカに再移住するか、トルコに定住するかという二手に分かれた。

「2 章 「テュルク・ムスリムの国トルコ」というモデル・ストーリー」では、タタール移民が共有する「テュルク・ムスリムの国トルコ」への移住というモデル・ストーリーについて、その内容と、実際の語りで見られる距離感に着目した。テュルク系民族のムスリムが多数派を

占め、なおかつソ連圏に取り込まれていない唯一の国トルコに対する親近感は、主に1世によって生み出された。しかし、タタール移民のトルコ移住は、トルコへの移住と適応という単純な構造では理解できない。2世にとって慣れ親しんだ生活は極東にあり、移住後の生活を評価する基準となって、時に適応を阻むことがあったのである。

3章、4章では、移住経験のなかでも移住理由とトルコ社会への適応に関わる個々人の語りにおいて、一連の場所がどのように解釈されているかを分析した。「3章 朝鮮半島および旧満洲生まれのタタール移民2世の語り」では、朝鮮半島を幼少期に離れ、トルコ人でもタタール人でもある自己を肯定する者、20代前半のとき朝鮮半島からトルコに移住し、トルコ語の豊かさや、言語、宗教の類似性は認めるものの、トルコ社会には批判的で、日本語世界に帰属意識を抱く者、10代前半のとき旧満洲からトルコに移り、旧満洲、トルコ、タタールスタンという3つの「祖国」をもちつつ、生きていく場所はトルコだと考える者を取り上げた。

「4章 日本生まれタタール移民2世の語り」では、20代前半で日本からトルコに渡り、日本で獲得した技術やトルコに関する情報を抛りどころに、トルコと日本のギャップを前向きに捉えた者、20代前半でトルコに渡ったのち、同地におけるタタール移民の減少から再移住を考えるようになり、30代前半で渡米したものの、人生にとって有意義な経験をトルコで得ることができたと評価し、同時に「我々」をインターナショナルな存在として規定する者、幼少期にトルコに移住したため日本の記憶はないものの、親やほかのタタール移民を通じて、極東を経由したタタール移民ならではの価値観を内面化した者に着目した。

「5章 タタール移民の変化する「故郷」」では、複数の語りを包括的に見直しながら、置かれた状況に呼応して「故郷」が生み出されていく様相をたどった。「テュルク・ムスリムの国トルコ」は、極東生まれタタール移民2世にとっての唯一の「故郷」ではない。トルコ移住のモデル・ストーリーから見えてくるのは、研究者や社会からの期待、1世による「故郷」の創出、インタビュー時点でも理解されやすい語り口、逸脱としての移動と戻るべき場所の強制である。タタール移民が実際に有するのは、極東各地の移民社会、極東で生まれ育った場所、トルコ社会、ヴォルガ・ウラル地域という、ひとつの国や地域に限定されない複数の「故郷」であり、それぞれの場所に対する帰属意識の有無、強弱、内容もまた、変化を遂げてきた。すなわち、1)移動という経験を共有することで、タタールの名のもとに集団を形成した人びとは、2)トルコという新たな「故郷」を創出し、3)トルコ移住後は、直接あるいは間接的な極東の記憶や経験を抛りどころとしながら、4)ソ連解体によって先祖の「故郷」を初めて訪問すると、帰属先の一部として再認識するようになったのである。

このようなタタール移民の「故郷」のあり方は、「ギョチメンリック」（移民であること）というトルコ語の言葉そのものに表されるだろう。ホスト社会と、マイノリティとしての自身の来歴との相違のなかで、常に立ち位置を問われてきた2世は、故郷喪失者としてではなく、それぞれのホスト社会の意向に沿うよう戦略をとりながら、帰属意識を抱く対象や内容を変化させることで、心の抛りどころとしての「故郷」を確保してきたのである。

以上のように、人の移動と向き合うことがより一層の重要性を帯びる今日、約100年前のロシア革命を機とするタタール移民の歴史的経験は、現代的な意義をも有するのである。